

【論文】

青年期の「解離」に関する一考察¹⁾²⁾

山口朋花(岩手大学大学院人文社会科学研究所)

織田信男(岩手大学人文社会科学部)

I はじめに

解離という言葉を目にする時、一般的には解離性障害等の病的な状態をイメージすることが多く、これまでの解離に関する研究は「病としての解離」に焦点を当てたものが中心であった。しかし、解離とは本質的には解離性障害のみを指す言葉ではない。解離という言葉を使う時、それが解離性障害に限定されない広義の意味で扱うのであれば、解離はその言葉が含むところとする意識の昏迷や意識・視界狭窄、健忘のみでなく、一種の催眠や暗示によって引き起こされる宗教性を含んだ儀式や役割(憑依、トランス、シャーマン)などの変性体験も含まれると考えられ、文化に多大な影響を受ける概念となる。このような広義の「解離」を使う場合には、解離というものが「病か、何か」という疑問が生じ、さらに、解離が現象の記述と説明との両方に同じ「解離」という用語が用いられていることに加え、幅広いコンセンサスの得られた単一の概念規定を欠いている(田辺, 2002)ために、現在まで多数の研究の蓄積がある一方、その概念を捉えることが困難になっている。そこで本研究では、「解離」を病的なものと限定せずに包括的に検討することを目的とし、質問紙を使用した量的な調査に加え、高解離傾向者へのインタビュー調査を実施し、「解離」に関する考察を行った。

II 解離の定義

解離を検討するにあたって、本研究では解離の定義を「解離(dissociation)とは、通常は他の心的過程と結びついているはずの、思考・感情・知覚・行動・記憶などの心的過程やその一部が切り離されて、意識や想起あるいは意志の統制の及ばないものとなり、一時的にあるいは持続的に人格の統合性が失われること」(田辺, 1994)とした。また、野間(2014)は同じ解離という言葉を用いても、それがどのようなレベルの解離を意味しているのかを常に意識する必要があると指摘した。そこで、本研究で扱う解離については、それは病的な解離のみに限定されるのではなく、日常水準での解離的意識状態を含んだ「心理機制としての解離」(野間, 2014)と設定した。

III 第1研究

1. 問題と目的

解離研究では、病的な解離と心的外傷体験、特に性的虐待との関連が指摘されてきた。解離と心的外傷体験との関連について、Patnam(1997/2001)は経験記述的論文が圧倒的な心

¹⁾本論は、山口(2017)の修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

²⁾本論は、本研究は岩手大学の倫理審査委員会の承認を受けた研究である。

的外傷体験と解離とのあいだの有意な関連を記録しており、心的外傷が病的解離の「原因」となるという結論に文句をつけることはむづかしい(Patnam, 1997/2001)と、解離と心的外傷体験の関係を考察した。量的な研究においても、①解離性障害患者が報告する心的外傷が高水準である、②いくつかの研究によれば、解離は外傷の重篤度指数と有意に相関する、③心的外傷をこうむっていない患者および非患者比較群に比して、外傷をこうむった被検者の解離が有意に高水準である、④心的外傷周辺の解離が将来の PTSD 発症の予告因子であること(Patnam, 1997/2001)を説明した。しかし、近年の日本国内の精神科医・心理臨床家による自験例報告や書籍では、心的外傷体験の既往が見当たらない解離性障害のケースが報告され、解離といじめ・親子関係の課題等との関連を検討する論文も見られ、解離は心的外傷体験だけでなく、様々なストレスフルイベントとの関連が示唆されてきた。例えば、池田・岡本(2015)によると、解離傾向の高い(解離性体験尺度の得点が高い)大学生の主なストレスラーを持続型(死別・離別・いじめ)、一時型(人間関係・環境・家庭などの一時的なストレス状況)に分類し、それらが解離傾向と中程度に関連していたことを示した。しかし、この結果に関しては、質問紙での教示を“過去のストレスを感じた出来事についてお尋ねします”とし、ストレスラーを尋ねる際、“最もストレスフルだった出来事”としなかったため、ストレスラーを記入した対象者が最もストレスフルな出来事を報告していなかったことも考えられる(池田・岡本, 2015)と、解離との関連性を確かめるべきストレスラーについて統制が不十分だった点が指摘された。この点を踏まえ、本研究の第 1 研究では“最もストレスフルだった出来事”と解離との関連を調査し、さらに、精神的健康との関連を調査することで、解離を包括的に検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

大学生 138 名(男性 51 名、女性 87 名)であった。

(2) 調査時期および調査手続き

2016 年 1 月から 10 月にかけて、集団法による質問紙調査を行った。調査者対象者には回答の自由が与えられ、回答者には平常点の一部が加点された。

(3) 質問紙構成

①解離：解離性体験尺度(田辺・小川, 1992)を使用した。解離性体験尺度は全質問項目の平均値を使用した。カットオフポイントは 30 点、50 点以上で解離性障害を疑うにたると想定されている。また、解離性体験尺度では、DES-T と呼ばれる 8 項目を用いて、受検者が特異な解離体験を有する分類群の中に属するか否かを判別する方法が提案され、大規模データの解析によって推定式が定められている。本研究では、DES-T で閾値を超えた項目が 2 つ以上ある対象者を解離リスク高群とし、閾値を超えた項目が 1 つの対象者はリスク中群、閾値を超える項目が無い対象者をリスク低群として分析を行った。解離性体験尺度の得点については、以降 DES 得点と表記する。②心的外傷後ストレス症状：自由記述で書かれた特定のストレスフルイベントに由来するストレス症状を調査するため、出来事インパクト尺度(Asukai et al., 2002)を使用した。出来事インパクト尺度は、記述された特定のストレスフルイベントについて、「そのことを思い出すと、身体が反応して、汗ばんだり、息苦しくなったり、むかむかしたり、どきどきすることがある」というように、ス

トレス症状の程度について尋ねる尺度である。下位因子は侵入症状 Intrusion、回避症状 Avoidance、過覚醒症状 Hyperarousal の3つで構成される。カットオフポイントは25点とされ、合計得点が60点以上で十分にPTSDと診断できる症状が維持されていると判断するにたとえ想定されるものである。以降、IES得点と表記する。③精神的健康：日本版GHQ30(中川・大坊, 1996)を使用した。この尺度は6因子構造であり、因子は、一般的疾患傾向、身体的症状、睡眠障害、社会的活動不安、不安と気分変調、希死念慮とうつ傾向からなる。④自由記述：自由記述形式では「あなたのこれまでの人生で最も困難であった出来事は何ですか」を問い、対象者にストレスフルイベントを記述するよう教示した。

3. 結果

本研究で得られた「最もストレスフルだった出来事」の内容を表1に、ストレスフルイベントごとのDESの得点を図1に示す。次に、解離(リスク低群・中群・高群)と性(男・女)の2要因分散分析の結果(表2)、IES-R-Jの下位因子全てにおいて、解離の主効果が認められ(侵入 $F[2, 132]=4.75, p<.05$; 回避 $F[2, 132]=4.71, p<.05$; 過覚醒 $F[2, 132]=3.23, p<.05$)、多重比較の結果、リスク低群<高群であった。GHQ30の下位因子のうちでは、「身体的症状」「不安と気分変調」について解離の主効果がみられた($F[2, 132]=4.57, p<.05$; $F[2, 132]=8.46, p<.01$)。また、「不安と気分変調」「希死念慮と抑うつ」について性の主効果が確認された($F[1, 132]=6.06, p<.05$; $F[1, 132]=4.94, p<.05$)。

表1. ストレスフルイベントの内容と出現割合

ストレスフルイベント	震災	死別	離別	いじめ	受験	挫折	対人葛藤	病気・けが・障がい	部活動	出来事の重なり	心的外傷体験	その他
割合(%)	9.4	11.6	6.5	8.0	13.8	6.5	10.7	11.6	2.9	5.1	2.1	11.6

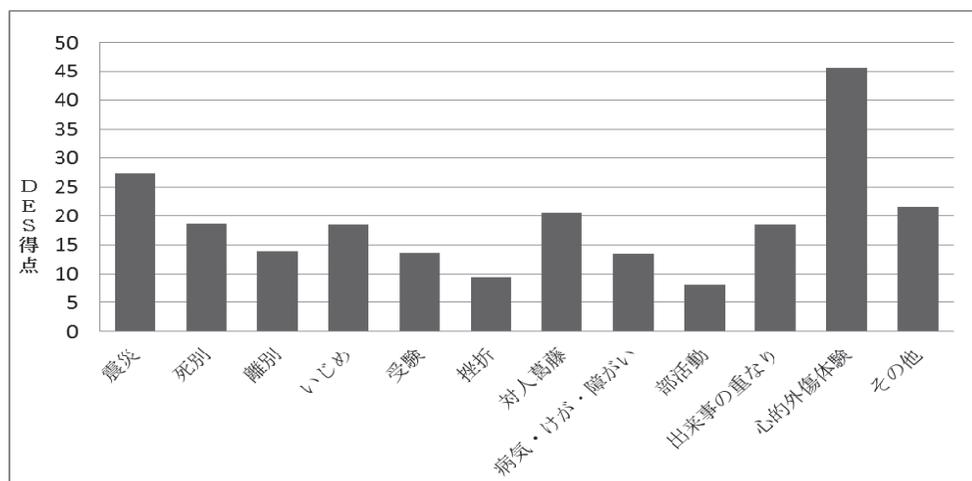


図1. ストレスフルイベントカテゴリごとのDES平均値

表2. 分散分析の結果

解離リスク群ごとの平均値および標準偏差							分散分析		
解離	リスク低群		リスク中群		リスク高群		解離	性差	交互作用
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	F値	F値	F値
N	30	52	9	18	12	17			
侵入	M 7.23 SD (6.58)	5.87 (5.29)	6.44 (7.37)	7.89 (7.51)	13.83 (6.94)	8.00 (7.56)	4.75* (低<高)	n. s.	n. s.
回避	M 8.00 SD (5.71)	7.10 (6.40)	9.67 (8.67)	7.22 (5.87)	12.75 (6.72)	11.47 (9.02)	4.71* (低<高)	n. s.	n. s.
過覚醒	M 4.20 SD (4.35)	3.63 (3.79)	5.22 (5.04)	4.50 (4.55)	7.33 (5.28)	5.47 (5.41)	3.23* (低<高)	n. s.	n. s.
一般疾患 傾向	M 2.08 SD (1.84)	2.16 (1.83)	1.75 (1.03)	3.00 (2.86)	2.38 (1.60)	3.40 (2.50)	n. s.	n. s.	n. s.
身体症状	M 1.54 SD (1.79)	1.62 (1.33)	1.50 (1.69)	2.44 (2.13)	2.50 (1.41)	3.60 (3.29)	4.57* (低<高)	n. s.	n. s.
睡眠障害	M 1.63 SD (1.58)	1.84 (1.68)	1.50 (1.51)	2.44 (2.80)	2.38 (2.13)	3.33 (3.44)	n. s.	n. s.	n. s.
社会的活 動障害	M 1.29 SD (1.85)	1.24 (1.64)	.38 (0.74)	1.94 (2.62)	2.00 (1.85)	2.27 (1.98)	n. s.	n. s.	n. s.
不安と気 分変調	M 1.46 SD (1.50)	2.40 (2.18)	1.38 (1.40)	3.75 (3.79)	4.13 (2.10)	4.80 (3.08)	8.46** (低, 中<高)	6.06* (男<女)	n. s.
希死念慮 と抑うつ	M .21 SD (0.59)	.76 (1.44)	0.00 (0.00)	1.81 (3.19)	1.00 (0.93)	1.20 (2.24)	n. s.	4.94* (男<女)	n. s.

4. 考察

解離リスク高群は解離リスク低群に比較し、「最も困難であった出来事」に関する侵入症状、回避症状、過覚醒症状の得点が有意に高く、ストレスフルイベントを心的外傷体験に限定しない本研究においても、解離とストレス症状との間に統計的に有意な関連が見られた。精神的健康に関しては、解離リスク高群は低群に比較し有意に身体的症状が表現されやすく、不安と気分の変調が高いことが示唆された。精神的健康のうちの「身体症状」について、元来、解離性の症状には身体的な症状も含まれており、解離は精神的な症状に限定されず、身体表出されるものとも関係があることが示唆された。「不安と気分変調」との関連について、解離は周囲への過剰な注意や注意の狭窄、それに伴う心理的負荷のために、日常的に不安を感じ、感情が不安定になりやすいことが考えられた。

IV 第2研究—3名の高解離傾向者を対象としたインタビュー調査—

1. 問題と目的

解離体験は解離性障害患者に限らず、ほとんどの人に、特に児童期・青年期に体験されていると考えられている。実際、解離性体験尺度は30点がカットオフポイントとされているが、30点以上得点する者は先行研究(田辺・小川, 1992)においても、本研究でも3割程度存在した。しかし、日常的な水準で体験される解離について質的に検討した研究は国内では未だ数は少ない。現在までは、解離は多くの解離性障害患者や解離体験の事例の蓄積によって理解されてきた。こうした研究史を踏まえ、解離の本質的かつ包括的な理解を志

すのであれば心理尺度による測定だけでなく、事例によって得られる豊富な情報を査定することが望ましいと考えた。また、現在まで構築されてきた解離理論の基盤となる事例は、その多くが欧米諸国のものであることから、日本においては解離体験が具体的にどのようなもので、どの程度で体験されるかを検討することは、国内での解離理論研究の発展・修正について有用だと考える。さらに、本研究で対象とする非臨床群において、解離が日常水準でどのような機能を果たしているかを理解することは、臨床群の解離と質的にどのような点が異なっているかを比較可能にし、「病の解離」についての理解にもつながると考える。そこで本研究では、解離の体験率が高い人々がどのような解離体験を経験し、その体験が日常生活もしくは人生においてどのような意味・機能を持つのかを確認することに焦点を当て、研究を行うこととする。

2. 方法

(1) 調査対象者 3名

(2) 調査時期

2016年10月から11月にかけてインタビュー調査を実施した。

(3) 調査手続き

第1研究で実施した質問紙調査でインタビュー調査に承諾した人に対し、大学構内の面接室で個別の半構造化面接を行った。インタビュー時間は約30分～40分であった。調査の前後で研究協力と研究発表の了承を得た。

(4) 質問項目

質問は調査対象者の質問紙を参照し、個人内で特に解離体験率の高い項目について尋ねた。また、高い体験率とは70～100%の間での体験率を指す。質問は「(DES項目から体験率が高い項目について)この体験の具体的な様子について教えてください」「その体験はあなたにとってどのような意味のあるものですか」等、具体的体験内容、生じる環境、契機、体験の評価・意味等を主に尋ねた。また、各体験が統一された自分史に組み込まれているかを検討するため、記憶の有無と意識状態について確認を行った。

3. 結果

(1) 解離体験の体験環境と内容の要約

各調査対象者に尋ねた質問項目は表3の通りである。本研究では調査対象者の語りからは共通して、自分史の分断を伴わない比較的軽度の行動・記憶の切り離しが見られた。これらの解離的体験の自覚は、痛み等の身体感覚や目的地に到着したこと等の行動の完了、他者からの指摘によって促されていた。Bさん、Cさんでは没入体験が確認された。

表3. 調査対象者に質問したDESの項目

対象者	項目番号	項目内容
Aさん	2	人の話を聞いているとき、言われたことの一部、または全部が、まったく耳に入っていなかったことにふと気がつく、というようなことがある。
	10	自分が言った覚えのないことで、うそをついたと責められる、というようなことがある。
	22	状況によって全く違ったふうに自分が振舞うので、自分がまるで2人の別な人間のように感じられることがある。
	24	あることを実際にしたのか、それともしようと思っただけなのかよく思い出せない（例えば手紙を出してきたのか、それとも出そうと思っただけなのかはっきりしない）というようなことがある。
	27	何かをするように促したり、自分のしていることに意見を言ったりする声が頭の中に聞こえる、というようなことがある。
Bさん	17	テレビや映画を観ていて、周囲に起こっている出来事に気づかないほど物語に没頭していることがある。
	19	痛みを無視できることがある。
Cさん	22	状況によって全く違ったふうに自分が振舞うので、自分がまるで2人の別な人間のように感じられることがある。
	1	自動車・バス・電車・自転車などに乗っていて、今までそこに来るまでのあいだのこと（全て、または、ある場所からある場所までであったこと）。
	2	人の話を聞いているとき、言われたことの一部、または全部が、まったく耳に入っていなかったことにふと気がつく、というようなことがある。
	3	自分がある場所にいるのに、そこにどうやってたどりついたのかわからない、というようなことがある。
	22	状況によって全く違ったふうに自分が振舞うので、自分がまるで2人の別な人間のように感じられることがある。
	23	ある状況の下では、普段なら困難なこと（例えばスポーツや仕事や対人関係など）をととても容易に、思うままになしとげられることがある。
	25	したという記憶はないのに、何かをしていた、というようなことがある。

① Aさん

表4. Aさんの語り内容要約

対象者	項目番号	体験環境、きっかけ	具体的体験内容の要約
Aさん	2	考えることがあれば、多い時で一日に2回くらい	物思いにふける時や考え事をしている時、ぼーっとしてしまう。ぼーっとして聞き逃してしまう。
	10	日常的に高い頻度で	言った内容だけでなく、言ったこと自体を忘れてしまう。指摘を受け、「あれ、そんなこと言ったかな?」となる。本心を隠したくて適当に言ったことのように感じられる。
	22	震災を契機に出現家から出たら変わるように感じられる	情熱的で人好きのする自分、冷めている自分、その二つの違う自分を常に見ていて統合を図っている自分が感じられる。それぞれ、震災前の自分、震災後の「どうせ」と考える自分、「震災前の自分ならどうする?」などの仮定を考える自分。
	24	一日に3回くらい	行動を完了させずに、知らず中途半端な状態でその場を離れてしまう経験がある。
	27	何か選択を迫られている時	誰かが言ったというよりは、頭の中で反響するように聞こえる。

質問紙の回答を参考に表4の5項目について質問した。記憶に関する質問では、項目10についてのみ他者からの指摘がなければ自覚の難しいものであることが確認された。それ以外の項目では、項目22や24においても、その行動や状態について明確に自覚的であった。項目22については『確実に震災前と震災後、変わったというか二つあるんです』という語りが見られたが、記憶や意識に関する困難な状態は見られなかった。それぞれの自分の特徴について、①震災前：『情熱的で人好き、欲求に満ちている』社交的、対人場面での自分、②震災後：『「どうせ」とか…そんなことばで表せる』冷めた自分、③『①と②を見ているもう一人がいる。自分の根幹のようなもの』と表現された。項目27については『自分の内側の声が響いて聞こえる感じ』と語られた。

② Bさん

表5. Bさんの語り内容要約

対象者	項目番号	体験環境、きっかけ	具体的体験内容の要約
Bさん	17	何か集中するものがある時	読書、音楽、映画など何かに集中している時のいつもほとんど。
	19	痛みを感じる場面	別の事へ意識を向け、全く気にしないようにする。ふと気づいた時に「あれ何でこんなとこ痛いんだっけ?」となることがある。
	22	環境が変化した時	「外」だと思ふコミュニティにいる時ではスイッチが切り替わったように全く別の人になる、と周囲から指摘を受けたことがある。周囲の指摘を受けて「確かに」と感じる。

全ての項目で記憶の分断はなく、行動や状況について自覚的・把握的な語りが見られた。項目22について、自己の統一感は損なわれておらず『自分なりにその場に適應しているのかなと思います』という回答が得られた。

③ Cさん

表6. Cさんの語り内容要約

対象者	項目番号	体験環境、きっかけ	具体的体験内容の要約
Cさん	1	何かを考えたり、思い出している時	一つのことに集中していると、周囲のことが全然わからない。考え事をして、気が付くと目的地に着いていることがある。
	2	一日に1回くらい	どんなに集中しようとしても全然聞いてない時間が絶対にある。集中しようとしているのに、ふと15秒くらい「あれ…？」と意識が飛んでいることがある。
	3	何かを考えたり、思い出している時	項目1と同様。 『どうやって学校来たんだっけ思い出せないみたいな』経験がある。
	22	環境が変化した時	キャラ、人の感じを無意識に変えている。 周囲からの扱いが変わるから人が変わると感じている。
	23	成し遂げるべきことがあり、スイッチが切り替わった時	特定の状況で自分の中のスイッチのようなものが切り替わると、頭の中がすっきりして、明瞭になり、普段では成し遂げられないことができるようになる。 反対に、特定の状況や人の前では、不器用になり、手作業が全くできなくなったりすることがある。
25	何かを考えたり、思い出している時	項目1と同様	

項目2では、一時的な記憶・意識状態の変成が見られたが、記憶の分断は全ての項目において確認されなかった。項目22については、『キャラ』という語りがあり、比較的な軽度な水準での自己の変容を自覚的に体験されていることが理解された。また、項目23では表中の語りに加え、『普段だったら絶対出来ないような切り替えが出来たり、思ってもないように上手いこと言えたり』と言語能力面での変化を自覚していた。

(2) 解離体験の評価・意味

上記の解離体験の体験環境と内容の要約についてそれらの評価・意味を尋ねた結果を示す。

① Aさん

表7. Aさんの解離体験の評価に関する語り

対象者	項目番号	体験の評価・意味に関する語りからの引用
Aさん	2	人を振り回してしまう、あまりよくない。 なくなった方がいい。
	10	項目2と同様
	22	行動とか結果がより優れたものになる可能性を秘めているものだと思う。 出来るだけ取りこぼさないような選択ができる。 複眼的、賢い性能があるんじゃないかなって思う。
	24	なくなった方がいい。
	27	項目22と同様

Aさんは項目2と10について、人を振り回してしまうものとし、否定的な評価をした。

項目 24 は具体的な影響は語られなかったが、否定の評価であった。一方、項目 22 と 27 については、思考を組み立てる場面や、決断する際に果たされる機能が肯定的に評価されていた。『賢い性能、別の意見』といった表現がされており、A さんの知的活動の側面での役割が確認された。

② B さん

表 8. B さんの解離体験の評価に関する語り

対象者	項目番号	体験の評価・意味に関する語りからの引用
Bさん	17	悪気はないけど申し訳ない。 物に没頭できるってことは、悪いことではないと思う。 もう少し器用に、没頭しつつ、周囲のことにも気付けたらいいと思う。
	19	他の活動に支障が出ないように痛みを無視して、忘れてしまうっていうのは全然いいんじゃないかなって思う。
	22	今までの生活で困ったことがあるわけではない。 どっちもうまくやってるんだらうなとは思いますが。

B さんの語りでは解離体験に関して、良い・悪いという明確な評価は見られず、概ね体験について受容的な態度で語られた。項目 17 では、他者への申し訳なさを感じるものの、没頭する体験自体を肯定的に受けとめていた。項目 19 と 22 では解離体験の果たす機能・役割を認め、受容していた。

③ C さん

表 9. C さんの解離体験の評価に関する語り

対象者	項目番号	体験の評価・意味に関する語りからの引用
Cさん	1	ちょっと直さなきゃいけないけど、集中できてるなっていい面。
	2	致命的。 これだけはどうにか直したい。
	3	項目1と同様
	22	あんまりこれも良くないかなとは思っている。 本当はどこでも同じ自分でいたい。 自分なりの処世術だと思っている。 疲れるけど、悪くはない。
	23	素晴らしいと思ってます。 自分の中で、大事なアイデンティティみたいなもの。 強みになってる。
25	それくらい自分は集中できてるってことだと結構ポジティブにはとっている。 でもいい加減直さなきゃなとは思ってる感じ。	

項目 1、3、25 はまとめた回答となった。集中できることについては肯定的に評価されているが、物を失くす、行動がまとまらないという日常生活での困り事から、直していき

たい思いが語られた。項目 2 についてのみ、将来や社会に出た後の影響を考え、体験に対し明確に否定された。項目 22 では、その機能や自分にとっての役割を認め、一定の評価を与えているものの、『本当はどこでも同じ自分でいたい』という面では、Cさんの希望とは反するものであることが語られた。項目 23 については非常に肯定的な評価をし、解離体験の機能がアイデンティティとしてCさんの中で大きな意味のあるものであることが確認された。

4. 考察

病的解離にみられる特徴は深い機能的健忘と同一性の大幅な大改変、自己史記憶と同一性の大きな状態依存(Patnam, 1997/2001)であり、正常解離の意識状態の特徴は、知覚と注意の幅は狭くなっているけれども記憶や同一性はそれほど状態依存的ではない(すなわち、正常の意識状態から遠くは隔たっていない)ことだと考えられてきた。また、病的解離では「解離が当人の社会的・職業的な働きが目に見えて損なわれる原因となる程度に達する」(Patnam, 1997/2001)としてきたが、本研究で得られた解離体験は、正常解離との類似性が強く、外的に不適応を生じさせる極度の記憶、行動的変容がみられないことから、本研究の調査対象者の体験は先行研究で言われる正常解離/日常的解離範囲の体験であると考えられる。そこで舛田(2008)の日常的解離カテゴリーを参照し、考察を進めることを予定していたが、本研究では舛田(2008)の研究で明らかにされた日常的解離カテゴリーに属しない体験が確認された。本稿では特に、舛田(2008)の示した既存の日常的解離カテゴリーに属さない解離体験について考察した。

【キャラクターの変容】

DESの質問項目 22 について、対象者の語りの中では「キャラ」「別の自分」等と表現され、重篤度の面で明らかに解離性同一性障害にみられる人格変容とは異なる点から、本研究ではこの軽度な人格変容体験を「キャラクターの変容」と記述する。なぜならば、3名の経験している「キャラクターの変容」は、全ての体験について自覚的であり、自分の体験として帰属されていることから、日常的解離の範囲に属する解離体験と考えられるからである。自覚されたキャラクターの変容が解離体験であるかについて、記憶が一貫している以外の点では、キャラクター同士の切り替えが他の心理的領域とのやり取りを介していない(意識的領域とのやり取り不要である)ことから、「変容すること」は自意識から切り離されており、これを解離と解釈することは可能だと考えられる。この体験への評価は、3名全員が比較的肯定的な評価をした。これは、それぞれのキャラクターが期待されている役割を果たし個人に有益な結果をもたらしていること、対人関係において効果的に利用されているからと考えられる。しかし、病的に満たない人格に関わる解離体験をどのように扱うか、病的な同一性の障害と明確にどのような点で差異があるのかは今後も検討されるべき課題である。この日常水準での「キャラクターの変容」について検討することは、解離性同一性障害の人格交代の機序や、通常意識状態と異なる点を明確にするとともに、人の意識や、青年期の同一性の獲得という発達課題を相談する人などの支援にもつながると考えられる。

【頭の中で声が聞こえる】

柴山(2010)において、解離性幻聴は、他の精神疾患にみられる外的な位置から他者の声

としてはっきりと聞こえる幻聴とは異なり、自分の中に聞こえるという特徴があることが示唆されていた。本研究で得られた語りは、自分の中に聞こえる点から解離性幻聴に類似性をもつ体験ではないかと推測される。相違点としては、病的なものは、柴山(2010)が報告した言語性幻聴のうち63%が命令幻聴、54%が死などを促す幻聴、37%が中傷幻聴であり、その大部分が患者を直接に攻撃・中傷するものであったように、罵倒や悪口、本人に精神的苦痛を与えるものがほとんどであるのに対し、語りの中で確認された「頭の中で声が聞こえる」は、本人に苦痛を与えるものではなく、むしろ利益を与えるものとして知覚されている点である。このため評価や意味づけも肯定的であった。したがって、「聞こえる」という知覚面では類似しているが、そこに病的な影響がみられないこと、「キャラクター変容」と同様に肯定的な評価がなされていたと考えられる。本研究では、頭の中で聞こえるものは内声とは異なり、はっきりと聞こえると語られていたが、今後は内声との相違点を明確にしていくことが望まれる。そして、病的解離体験との弁別については「キャラクターの変容」以上に体験内容を精査する必要があると考えられる。これは、解離性幻聴が統合失調症をはじめとする他の精神疾患にみられる幻聴と比較し、幻聴と自分の思考や表象との連続性が窺われ(柴山, 2010)、主体にとって意外性や未知性がなく、自分の思考や記憶・空想などの表象がたまたまの知覚であるかのように感じられたと捉え直される余裕、自由、選択の可能性がある(柴山, 2010)ために、病的解離性幻聴と正常範囲の解離体験との明確な差異を設けることが難しいからである。今後は弁別よりも先に、解離性幻聴と呼ばれる現象が本質的に病的なのか否かを検討する必要があると考えられる。

【ある状況下で思うままにことを成し遂げることができる】

Cさんの語りからは、「思うままに成し遂げられる」だけでなく、反対に「全くできなくなってしまう」という状況も確認された。Cさんのポジティブな状況についての語りはフロー体験との類似性があり、ネガティブな結果をもたらす場合には、Patnam(1997/2001)のいう「技能、習慣、知能水準に困惑する動揺」という状態に類似性を見出すことができる。「技能、習慣、知能水準に困惑する動揺」とは、記憶機能の失調の古典形態(Patnam, 1997/2001)であり、患者は「頭が真っ白になる」等と報告するものと考えられてきた。本研究で得られた語りから、能力が向上する／低下するには特定の条件を要し状態依存的であること、いずれの状態でも記憶は統一性を欠くことなく保持されていることについてはどちらの状態においても共通しており、「全くできなくなってしまう」体験も「思うままに成し遂げられる」体験も意識構造上は同一のものであることが想定された。これらのことから、解離の機能は不適応だけでなく、フロー(Csikszentmihalyi, 1975/2000)が指摘するポジティブな意識状態とも関連があるのではないかと考えられる。

V 総合考察

本研究の結果、解離傾向が高い解離リスク高群は、個人の“最も困難だった出来事”に由来したストレス症状がリスク低群に比較し重く、身体的・心理的不調とも関連していることが示唆された。この本研究の結果は、病的解離を扱ったこれまでの研究結果を支持するものとなった。しかし、第2研究のインタビュー調査では、高解離傾向者における解離体験の具体的な内容を明らかにすると共に、それらの解離体験がネガティブなものに限らず、頻度・生起環境・機能によっては個人の中で肯定的な評価をされていることが示唆さ

れた。本研究では、調査対象者の人数が少なかったので研究知見の一般化に制限があるが、今後も様々な水準の解離を検討することで、「病としての解離」の理解だけでなく「病以外の解離」の理解に繋がる研究が求められると考えられる。

<引用文献>

- Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., & Nishizono-Maher, A. (2002). "Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R-J): Four studies on different traumatic events". *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 190, 175-182.
- Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond boredom and anxiety*. San Francisco: Jossey-Bass. (今村浩明訳(2000) 楽しみの社会学(改題新装版) 新思索社)
- 池田龍也・岡本祐子(2015). 比較的軽度なストレスと解離性体験の関連—ポジティブな対人認知の影響について— パーソナリティ研究, 24(1), 91-93.
- 舩田亮太(2008). 青年の語りからみた日常的解離の発達について パーソナリティ研究, 16(3), 295-310.
- 中川泰彬・大坊郁夫(1996). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引き(改訂版) 日本文化科学社
- 野間俊一(2014). 解離する生命 みすず書房
- Patnam, F. W. (1997). *Dissociation in children and adolescents*. New York; The Guilford Press. (中井久夫訳(2001) 解離—若年期における病理と治療 みすず書房)
- 柴山雅俊(2010). 解離の構造—私の変容と〈むすび〉の治療論 岩崎学術出版社
- 田辺 肇・小川俊樹(1992). 質問紙による解離性体験尺度の測定—大学生を対象にした DES (Dissociative Experience Scale)の検討— 筑波大学心理学研究, 14, 171-178.
- 田辺 肇(1994). 解離性体験尺度と心的外傷体験との関連—日本版 DES の構成概念妥当性の検討— 催眠学研究, 39(2), 1-10.
- 田辺 肇(2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦(編)講座臨床心理学: 3 異常心理学1 東京大学出版, pp. 161 - 182.
- 山口朋花(2017). ストレスフルイベントへの対処行動と解離体験との関連および意味づけについて 岩手大学大学院人文社会科学研究科修士論文(未公開)